

岡豊城跡
発掘調査

「やぐら」の規模解明

下段から屋敷跡遺構も検出

県教育委員会が進めていた歴史民俗資料館の建設に伴う岡豊城跡の第二次発掘調査の結果が、八月二十九日発表されました。それによると前回確認された「やぐら」跡の全容が明らかになったほか、詰下段から日常生活が送られていたと思われる屋敷跡遺構も検出。詰の形態がほぼ把握でき、きる画期的な調査となりました。

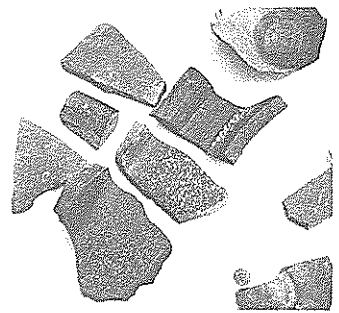


主殿屋敷跡と考えられる礎石群(詰下段)

前回は詰、二ノ段の約三百平方メートルを掘り、詰跡からやぐらと思われ、建造物の礎石の一部と石組みが検出されました。今回の調査はこの建造物の規模をつかむとともに、周辺部の土塁の残存状況の確認と、詰下段の状態を調べ、その性格を解明するた

め、詰と詰下段、約三百五十平方メートルを掘りました。この調査で、詰の部分から「やぐら」の礎石群をほぼ完全な形で検出しました。規模は南北五間二間、約一・八メートル、東西四間です。そのほかにも岩盤をくりぬいて作った柱穴が約三十個見つかりました。このことは「やぐら」の建造以前にも建物があったことを物語っており、兼序、国親、元親三代にわたる岡豊城の変遷がうかがえます。また、この部分は大規模な造成工事によって平面が作り出されていることがわかりました。

一方、詰下段からも礎石群が見つかり、この部分にも建造物があったことが確認されました。規模は南北



詰跡から出土した備前焼

五間、東西三間と考えられます。北部には張り出しがあり、張り出しの内部の土壇からは炭化物や焼土が出土しました。この部分は「かまど」であったと思われます。また、石うすの破片も出土。この建造物は岡豊城において中心的な「主殿屋敷」で、長宗我部氏や家臣がここで日常生活をしていたと考えられます。南には三ノ段へつなが

【岡豊城】

岡豊城は長宗我部氏の居城として著名な中世城館で、標高九十七メートル、絶好の展望と自然の要害を有する土佐の代表的な山城です。築城時期は不明ですが、兼序の時代に本山、吉良、太平、山田の連合軍に攻められて落城。その後、永正十五年に国親が帰城してから、天正十六年に元親が高坂城(現高知城)へ移るまでの八十年間、国親、元親二代の居城であったこ

ろ階段状の遺構があり、下に通じる出入口があったと見られています。今回の調査の結果、岡豊城の詰の構造が明らかになりました。詰の南西部には「やぐら」があり、石組みによって西の出入口とつながっています。「やぐら」の北側は広場であったと思われます。詰下段は外部から見えないように意識的に低くされており、「主殿屋敷」の防御を考えて作られていたようです。

出土遺物は土師質土器(備前焼、輸入陶磁器(白磁、青磁、染付)、渡来銭、土鍾など約三十点に上っています。県教育委員会では、今後二ノ段、三ノ段などを発掘、岡豊城の全容を解明していく方針です。

とは有名です。

頂上部の詰(本丸)跡、家老屋敷跡からなる連立式の山城とされており、残っている土塁などから堅固な防御施設があったことがうかがえます。

詰、二ノ段が三十年に県指定史跡、四十四年には既跡、香川五郎次郎親和之墓が市指定史跡となっています。当初この調査は三年計画でしたが五年に延長、昨年度に引き続き本年度は第二次調査が行われました。